

兼ちゃん

東京女子高等師範學校教授 岡田美津

(八) 赤い總ま

「兼ちゃん、玄關へ驅けてゝツて、誰だか見ておいで。」と母親は土曜の晝食を一口二口づゝ千代ちゃんに食べさせながら言つた。

お薯いもを半分口に頬張りながら、兼公は、椅子から下り降りて、玄關へ出ていつた。


「もしかしたら大鳥のおかみさんかも知れない。」とお芳は夫に話しかけた。

「何の用があるんだ。」と吉藏は尋ねた。かれは椅子にのけ反つて、屈託のない顔をして、一本のマッチ棒を何のあてもなく小楊枝に削つてゐた。

「昨日貸した品物を返しに來たのかと思つたのさ。」

「どんなものを。」

「話さなかつたかね。あのね、大鳥の宅で昨晚御客をするので青い花瓶を二つと、黄色い鸚鵡のついてる海老茶椅子被ひと、陶器のバルク入れとその他二品三品貸してく



れといつたのだよ。」

「どうも厚顔あつかましいいな。」

「だつて可哀さうに、あすこの家には、あんまり道具が無くて、それでゐてお客をす
るのが、それあゝ好きなんだから。」

「それちや、おれ達もそこへ招んだらいゝぢやないか。」と吉藏は人が好ささうに笑つ
た。

「お前さん、何遍招ばれたつて行きさうもないくせに。……兼坊はなせに手間取つて
ゐるんだらう……兼坊、何してるの。」

「今行くよ。」と息が塞つまつたような聲がきこえた。

「さつさとおしな。……大鳥のおかみさんぢやなかつた。あの人、青い花瓶を壊はし
てくれなけりやいゝが……おい兼坊、今誰だが來たの。」

「郵便屋さん。」

「お前何してゐたの。」

「郵便屋の小父ちやんがお菓子くれたから食べてたの。お父ちやんに手紙が來たよ。」

「まあ、どうだらう。この子は郵便屋さんと仲が良いんだね。その大きな手紙は何な

の。」

「お前、何だと思ふ。」と吉藏はにや／＼しながら尋ねた。

「あたい知つてるよ。」と兼ちやんが引取つた。「あたい瞰いてみたもの。寫真だよ。」

「あら！ 寫真かい。」

「そうよ。」

「早くさ、お前さん、見せておくれよ。ほんとに、まあ私やもう來ないのかと思つてた。お前さん汚よごさないやうにね。そして兼公には手を洗つて來ないうちは觸いらしてはいけない。……千代ちゃん、お前のかわい／＼お寫真を見せたげやうね。……兼ちやん。きれいに食べてしまつて、手を洗つておいで……お前さんて不器用な人だね。……封が切れないの。」

「いやに急せぐぢやねいか。」と吉藏は、その包を態わざとひねくりまはして焦心せしんしながら、

「明けて口惜くしき玉手箱たまてばこかも知れないせ。」

「お止としよ！もう、寫真は上出來に定つてゐるさ。お前さんのむだ口は眞平だ。」

そこで吉藏が包みを開くと、中からキャビネ型の光澤寫真が六枚出て來た。吉藏は暫ちよ時眺ながめてからアハアハと大口を明いて笑ひ出した。



「お前さんは大きな子供ね。」とお芳はすこし焦心して「一枚私にお見せよ。」

「そらよ。全く滑稽だな。」

「あたいにも一枚。」と兼公がせがむ。

「そらお前にも、ハア！ どんなだね。」

兼公はやゝしばらく寫眞を眺めてゐたが落膽したやうな表情をして父親を見上げ。

「どうして、あたいの總ぶさは赤くないの。」と問ひ訊した。

「吉藏は笑顔を止めて當惑さうな風をして。」

「赤くなるつて言つたぢやないか。」

「あゝ、赤く塗つてくれと寫眞屋に話してやるつていつたつけな。お父ちゃん、すっかり忘れちまつて。……だが立派な寫眞だらう。エ、兼坊。」

「總を赤くつていふのに、黒いんだもの。」と兼公は冷やかにいふ。

「ほんとにわるかつたなア……頼むの忘れて。……お芳、兼坊が文句いつてるのを聞いたかい。」

「何。」ときゝかへしたお芳は家族銘々の姿を嬉しさうに眺めては千代ちゃんに話してきかせてゐるのだつた。

「兼坊がね、帽子の總が赤くないつて、いやがつてるんだ。おれが寫眞屋にいふのを忘れたんでな。」

「却て丁度いゝぢやないか。寫眞の中で總が赤いのなんて變だもの。」

「だつて、あたいの總は赤いんだよ。」と兼公が言ひ張る。

「赤いがね。赤でも青でも黄色でもその他ほかの色でも寫眞には寫らないんだよ。」

「どうしてなの。」

「母ちやんもそのわけは知らないの。寫眞に色を塗るのはよくないんだから。」

「どうして。」

「たゞよくないの……千代ちやんお父ちやんがわかるかい。え、坊や。」

お芳はまた寫眞の方へ氣を向けてしまつた。「あゝ、お父ちやんが分つたね。偉い〜。」

「そいつはお父ちやんよりも偉いや。」と吉藏はすこししよび悄氣で「おらにはそう見えねんだ、その厄介なカラで息が填まりさうぢやねいか。」

「なに、立派に見えるよ。このカラをさせてよかつたと私は思つてる。お前さん、すこし眞面目すぎるけれど、私は、男がふざけたやうな格恰をして寫眞に寫るのは好かないよ……丁度胃病が癒つたつていふ新聞の廣告になる寫眞のやうでね……アこれが

お前ちゃんは(千代ちゃんに向つて)……折角のいゝ寫眞をお汁の中へ入れてはいけませんよ。」

「ちつともいゝ寫眞ぢやないや。いやな、へば寫眞だ!」と怨みを抱きはぐゝんでゐる兼公は口を出した。

「そんな事いふもんじゃない。」と母親はたしなめた。

「いやな、へば寫眞だ! ちつとも好きぢやないや。あたい……」

「シー、そんなくだらない事をいふもんじゃない。原田のお祖父さんはお喜ひなさるよ、ね、お父ちゃん。」

「喜こんでくれゝば結構だが。大體としてはわるくはないが……」

「あたのお祖父ちゃんに赤い總だつて言つたんだよ……だのに赤くないや。」と兼公がいふ。

「赤い總がなんだい。」と母親が笑ふ。

「おら實際弱つたな。」と父親は大眞面目で「總を赤く塗らせると兼坊に約束したのに。」

「だつて、今になつちや赤くならないんだから、それまでの話ぢやないか。」

「あたい、金子の初ちゃんに赤い總だつていつたら、初ちゃんが他の子達に話したんだもの。」と兼公はすこし聲を震はせた。

「赤いんだなんてたしかにきまるまで、他に言はなけれあいのに。」と母親がいふ。

「だつて、確だと思つたんだ。お父ちゃんが赤いッていつたもの。」

自然に出る怨みの言語に吉藏は面目なくてたゞ押し黙つてゐた。

「すこし戸外へいつて遊んでおいでよ。」と母親が勧めた。

「行きたくないや。」と子供は不平顔で答へた。

「母ちゃんのいふ事をきくもんだよ。千代ちゃんはお晝寝をするね。昨夜よく眠らなかつたし、今朝も寝なかつたから。お前も行つておいで、お茶のときにお菓子上げるから。だけど遠くへ行くんぢやないよ。」

「兼公は行きたくないのかも列れないせ。」と吉藏はやつとの事でそれだけ言つた。

「そんな事があつたら不思議なもんだ。いつて初ちゃんと遊んでおいで。」
兼ちゃんは氣が進まないらしく出ていつた。

お芳は、眠りかけた子供を軽く叩きながら聲もちいさく、



「お前さー私が兼坊にあゝしろかうしろと言つてる時に口を出しちやいけないよ。」

「それや、おれがわるかつた。だが、あいつに對して、おら、ほんとに氣の毒でな。

戶外へ出るのをあんなに厭いやがつて居たらう。」

「あの子は時々強情張るからね。」

「さうだがね、今のは強情ぢやない。あいつ、可哀さうに恥をかくのがいやなんだせ。」

「恥をかく？」

「そうよ。かりに金子の初子だの他の奴やつらが寫眞の事をきくとしたらあいつ何ていふだらう。きつと赤い總で自分が寫つてるとか何とかいつてすこしや前に自慢したらう

ぢやないか。それが今……

「何だよ、お前さん！ そんなに心配する程の大事件ぢやないやね。」

「あの子にや大事件さ。あいつ中々高慢だから、友達に寫眞のは赤い總でなかつたと言ふのは辛いシだせ。」

「そんな自慢しないがいゝに。」

「だつてさ。」

「友達にそんな事話さないで置けばいい。」

「それがきつと話すんだ。友達が忘れずに尋ねれば、あいつ虚言うそはいはないから。」

「それあ、そうだね。」

「すると、友達があいつを笑つたりからかつたり、それがまあ、いつまで續くか分らねい。」

「うちの子にからかつたりすれば、承知しないからいゝ。」とお芳はいきまいた。

「だめく、そんな事いつたつて。あいつが辛い目見るだけだ……それがおれのせいなんだ……みんなおれのせいなんだ。」

お芳は何も言はずに立ち上つて、千代坊を床に寝かして食事の後片付をし初めた。洗ひ物をすますと、お芳は吉藏がつまらなさうに煙草をふかしてゐる方へむいて

「あの總を今からでも赤くする工夫はないかしら。」といふと

「ほんとにそういふ氣かい。」と吉藏は立ち上つた。

「あ、あの子も喜ぶし、お前さんも喜ぶから。お前さん、自分で何とかならないの。」

「繪具がないもの。それに塗り方を知らなくちやこの上に色を塗るのはむづかしいからな。」と吉藏は寫眞をつくくと眺めてゐる。

「赤いものがすこしあればいゝんだがな。」



「そうよ、すこしな……あ、うめい事考へた。」と吉藏は急に有頂天になつて叫んだ。

「静にく！ 坊やが居ますよ。何なの。」「當らないか。」「當らないね。」「

郵便切手さ。」と得々として、小聲で吉藏が答へた。

「ほんとに思ひつきだね!。」とお芳は感心して「私のお金入に切手が入つてる、原田のおかみさんに手紙を出さうと思つてゐたので。全くお前さん、考があるね。兼坊がさぞ嬉しいがるだらう。」忽ち夫婦は寫眞を前にテーブルに就いた。

「お前は立派な女だな。」と吉藏がいふと

「何、くだらない事いふのさ。」とお芳は口でそいつても立腹の様子はしなかつた。

お芳が鏡を渡すと吉藏は手に持つてゐる切手から小部分を切り落した。

「よく氣を付けてよ……寫眞をいけなくすると困るから。」とお芳がつづやく。

「おれがうまくするよ。……しまった、嘸みこんぢやつた!」

「もう一ヶ所きればいゝ。」

いはれる通りに吉藏はもう一ヶ所切りとつて、兼公の帽子の總のところへピタと貼り付けた。それから身を起こして自分の細工に感服して眺め入つた。

「どうだ、お芳。」「いゝね。」「あいつ悦ぶだらうな。」「悦ぶとも。」「

二人は笑み交した。

兼ちやんが歸つて來て見ると、父も母もにこついてゐるので自分もにこにこした。

「お前、初ちやんと遊んで來たのかい。」と父が晴々としてきくと

「あゝ。初ちやんだの他の子だのと鬼ごっこしたけれど一度も鬼にならなかつたよ。」

「お前赤い總のこと何もいはなかつたのかい。」と父は前掛の下に寫眞を隠してゐる母親と、こつこり目くばせをした。

「いつたよ。寫眞に總を赤くするのを止したツていつたの。黒い方が立派だからツて。」

「そうしたら、みんな何ていつたい。」と母親が尋ねた。

「みんな黒の方が立派だつていつた。富ちやんだけはいはなかつたから、鼻んとこをなぐつてやつたら、赤より黒の方がいゝつて言つた。」

吉藏はお芳に黙つてゐると手眞似で制して、

「兼公お前、帽子に赤い總のついた寫眞欲しくないか。」

「ちつとも欲しくないや。」と傲然として「あたゐ、もう、赤い總きらひだよ。」

吉藏とお芳は手持無沙汰に顔を見合せた。